

私は、平成二十四年の夏、休暇を利用して十日ほどタイに滞在しました。目的は、短期間ではありますが、仏教の本場タイにおいて、比丘（びく）と呼ばれる仏教僧侶の生活を体験するためでした。

その前年に、東京の美術館で、オレンジ色の袈裟を着た二名のタイ人僧侶と出会いました。僧侶達は日本語が流暢に話せたので、私は、タイへ観光旅行に行ったことなどを話しました。彼らの笑顔が非常に好印象だったので、私はその後、都内にあるタイ仏教の寺院にお邪魔したり、タイ人たちのコミュニティにも顔を出すようになりました。

熱心な仏教国であるタイの成人男性は、短期間の出家を、一生のうちに何度か繰り返すということは以前から聞いておりましたが、東京在住のタイ人男性が、短期出家をするために、祖国に戻るとい話を聞いているうちに、「芳賀さんもご一緒にいかがですか？」と僧侶から勧められました。

当然のことですが、最初、びっくりして冗談かと思いました。私は、今までに、何度か日本のお寺の主宰する座禅会に参加したことがあるくらいで、修行と名のつくようなことはしたことはありませんでしたし、仏教に関しての見識もほとんどありませんでした。

特にタイの仏教は、「飲酒をしてはいけない」から始まって、「お金を持たない」、「稼いではいけない」など、二百二十七もの戒律があり、剃髪はもちろん、眉毛まで剃ってしまうという厳しいものです。

けれども、息子が僧侶になると、母親の大きな功德になると仏教国の人々は考えていると聞いて、私は少し興味がわいて来ました。私の母親は、数年前に事故で亡くなっておりましたが、息子の私は、生前の親孝行や供養ということを、ほとんど行っていないからです。母親の顔が、ぼんやりと浮かんできました。そして、私は、もともと好奇心の強い方なので、どんなものか体験してみたいという興味も湧いてきました。

まず家族に相談したところ、妻からも二人の息子たちからも軽く反対されましたが、最後は「そんなに坊さんをやりたければ、勝手に行けば」ということになりました。

次に、職場の上司達に伝えると、「気分のリフレッシュに良いだろう」とあっさり了解をいただきました。

いざ、タイに行くという話は決まったのですが、タイ仏教の寺院で、比丘と呼ばれる僧

侶になるためには、長老と呼ばれる導師とパーリ語と呼ばれる二千六百年前のインドの言葉で、問答をしなければなりません。そして、その場に集まった十人以上の比丘たちから、承諾を頂かないと、比丘にはなれず、沙弥（しゃみ）という小僧さんで終わってしまいません。

せっかくタイまで行って、頭を丸め、眉毛まで剃ったのに、小僧さんで終わっては残念だと思い、通勤の時間帯等にパーリ語の問答吹き込んだテープを聴いて、覚えました。

私が出家をしたお寺は、タイ郊外にあり、四名で出家式に臨みました。日本人が出家すると聞いた近所の人たちが、大勢集まって、朝食を作ってくれましたが、なんと握りすしでした。非常に、ありがたかったです。

出家のための式典は、一時間半くらい続きました。緊張して、途中、吐き気を催したり、パーリ語の単語が出てこなくて、中断してしまうこともありましたが、なんとか無事に終了して、比丘の袈裟を着ることが出来ました。

出家後、先輩の比丘に連れられて、バンコクの空港からチェンマイまでの国内線にのりました。私は、チェンマイの寺院にて、修行することに決まったからです。寺から町に出ると、日本人のわか僧侶である私に対しても、タイの人々は手を合わせ、膝間ついて、拝んできます。この国では、僧侶の地位は、国王よりも上であり、非常に尊敬されています。人々の尊敬を裏切らない、まじめな修行をしてくださいと先輩比丘から指導されました。

チェンマイにつくと、用意してあった自動車で二時間以上も山間部へ。山の中腹にある寺院で、私の比丘生活が始まりました。朝は四時に起床して、夜は十時に就寝するまで、読経と瞑想の毎日。食事は、朝食と昼食の一日二回。午後は食事が出来ないのです、空腹を感じることもありました。一日に何度かある休憩時間には、日本語、英語が通じるタイ人僧侶達と洗濯や掃除を行いました。

朝7時から、山を越えた寒村まで托鉢に行きます。満足に舗装もされていない山道を僧侶が十人くらいで隊列を組み、裸足で歩きます。トラックで出来た家々からは、朝食のための煙が上がっていました。放し飼いの犬、鶏が私たちの足元を駆け回っていたのが、今も記憶に残っています。

道路の脇には、村人が食料品を抱えながら、私たち僧侶の来るのを待っています。

胸に抱いたボウルの中に、村人から朝食の残りを分けてもらうのです。僧侶に渡すために、村人たちは、自分の食事を削っているであろうことは、すぐに想像がつかしました。タ

イのような仏教国では、僧侶に托鉢すると、功德を積み、幸せになると信じているのです。僧侶は、人々から得た托鉢の食材で、一日の命を得るシステムで、お釈迦様の時代から続いているものです。

ある日のこと、托鉢である村を歩いてみると、後ろの坂道を、中年男性が足を引きずりながら、私たちの後を必死で追いかけてきます。両手には、食料を大量に抱えていました。私は、彼が私たちに追いついてくれれば良いと思いついては歩いていましたが、托鉢のときのルールで、僧侶の一人は歩調を遅らせることも無く、前を向いて、たんたんと歩いていきます。

ある家の前で、托鉢を受けるために立ち止まった時、足の不自由な男性が、やっと私たちにたどり着きました。彼の手で、私は、ご飯を鉢に入れてもらいました。

私達は、食事を施しをしてくれた人々のために、パリリ語での祝福のお経を唱えるのですが、不意に涙が溢れてきました。比丘は、泣いてはいけないという戒律があり、その時は、先輩から、軽く注意を受けましたが、いつまでも涙は止まりませんでした。

托鉢を終え、寺に戻ると、生かされていることに感謝をしながら、食事をいただきました。

タイの仏教寺院では、孤児を引き取ったり、貧しくて教育を受けられない師弟を上級学校に通わせること等も行っていました。地元の人々の相談にのったり、災害時には、比丘自らが救援活動に参加することもあるそうです。タイの長い伝統の中で、寺院も含めて地域助け合いの精神が今も根付いており、すばらしいことだと私は感じました。

十日間比丘体験は終えた私は、東京にて、会社員としての生活を続けておりますが、時折、タイの人々の優しい笑顔を思い出すことがあります。将来は、日本とタイの人々が文化的に交流できるイベント開催等で、タイとの親善のお手伝いが出来ればと考えています。